
エキサイティングサッカー

chack

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エキサイティングサッカー

【Nコード】

N5274BA

【作者名】

chack

【あらすじ】

俺たちはサッカー部に入った。
遊びたかったんじゃない。。
それなのに・・・

コーナーの対処は我々の中学である海牛中^{うみうし}では、半マンツ―という手法を採用している。具体的に言うと、屈強な選手には1対1でマークを付け、その他の選手はエリアをカバーするようにゴール前に分散するという手法だった。

一見合理的なようだが、やられた際に責任も分散させるという海牛中の選手の意図が込められていた。バン、ヒュー、しゅるるるる、

「シャー」

相手のDFがマークを外してヘディングを決めた。腕を広げて走っている。

「あーちくしょー、誰だよマークしてたの」

金丸先輩はそう言うが、海牛中の狙い通り、その答えは生まれることはなかった。

俺もこの現状に少なからず不満を感じていたので、

「全マンツ―でいこう」

といったが、金丸は今ではなく、試合が終わってからゆっくり話そうといった。

結局試合は大差で負けた。悔しかったが、だからといって練習に強いモチベーションが生まれるわけではなかった。

みんなで決めて集まることにした。あまりにも、あまりにも部活の練習というものに対して、エネルギー感がなかったからだ。

国際首脳緊急会合だ、と光彦は言った。ふざけるな、その姿勢が負のスパイラルを生むんだ、と俺はいったが、そう言っている間にもマサシ監督が入ってきた。やはり金丸と似ている。

「集まって反省しているんだな、それが大事なんだ。」

と言って出て行ってしまった。しかし顔は怒っていた。

沈黙が流れる。金丸監督は、あまり走る練習メニューは組まないが、怒ったら本当に怖いのだ。金丸が口を開いた

「俺は強くなりてえよ」

「は、はい」

光彦が必要もない返事をした。すると、

「強くなるにはいくつかやり方がある」

そういったのはマサシ監督だ。出ていったのではなかったのか。

ここまでこれた・・・

「最後の相手は柳十六中か、相手にとって不足なしっ。」

金丸の言葉に俺は頷いた。春の大会、俺たちは準決勝で美雪中を破り、ここまで来ていた。

「ねえ、ちょっと」

美雪中のマネージャーの深海ちゃんだった。準決勝で光彦が勝利を決定づける3点目を入れた時に、膝から崩れ落ちて、顔に手を当てているのが見受けられた。涙を流したせいかな、目も赤くなっている、情熱的だ。

「なんでアレを」

「すげえことがわかったんですよ」

声が廊下から反響して聞こえてきた。

部室の窓にフツと黒い影が見えたと思うと、その影は左にスライドし、ドアを開けて屋内に入ってきた。

「今度の、今度の土日に練習試合をしてってくれて、隣町の中学から言われたっす」

「それはご苦労だな光彦、わかったというより言われたんだな。隣町って、美雪中^{みゆき}か？」

「そうです。美雪中っす」

美雪中といえば、ここらへんじゃ常にベスト4に入るなかなかの強豪校だ。

つたく、バーロオ、光彦のやついい仕事しやがる。

・・・砂地を這い、小石を巻き込んだボールがゴールの右に飛び込んでくる。キーパーが逆を突かれたため右手を地面に置き、コンパスのように体を反転させ、左手でギリギリボールを弾いた。コーナーキックになった。俺はフォワードだが守備のために自陣まで戻り、ハーライン辺りの得点版を見ると美雪中のマネージャーの深海ちゃんがいいた。深海ちゃんは顔が可愛く、また恐ろしいほど巨乳で、物事に対して情熱的だったため、光彦は二頭を持つキングレックスと恐れていた。俺はコートの方に意識を戻し、集中力を高めた。

「チェック遅れてんじゃねえぞ」

「すいません、金丸先輩」

キーパーの金丸は、チームでいちばん顔が怖いマサシ監督に顔が似ていて、魔界からの使者と呼ばれていた。俺達が入部してから、継続してそう呼んでいるせいか、性格が顔に迫いついてきたと思う。

実際、美雪中は強いのだが、今のシュートに限って言えばかなり距離があつたため、わざわざ金丸が逆を突かれる必要はないはずだつた。音ゲーで鍛えているから、バツグンの反射神経を持っている、と金丸は常常言っているが、未だ覚醒していないようだ。

「出た！地を這うボールや」

「ん」

光彦は、美雪中伝統の「地を這うボール」だ、と僕に説明してきた。彼が言うには、美雪中のフォワードは、入部してからすぐその必殺ボールの蹴り方を先輩から叩き込まれるらしい。で、さっきの遠距離シュートがそうだったらしい。

「敵にまわすと恐ろしいですね」

「おい、4番触つとけ」

ビュン、

ボールが弧を描いて飛び込んできた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5274ba/>

エキサイティングサッカー

2012年1月14日17時48分発行